

「いや、わたしも人間ですからな。人間にかかわることなら何でも、わたしにとって無縁とは思えんのですよ¹⁾」

テレンティウス『自虐者』77

1) 『ギリシア・ローマ名言集』柳沼重剛 編、岩波書店、2003年、岩波文庫。古代ローマを代表する喜劇作家、テレンティウスの劇『自虐者』から引用。“*Homo sum; humani nihil a me totum alienum puto.*”人間に関わる事象への幅広い共感を意味する語として近代の思想家たちに使われた。

推賞の言葉

— ジョン・イエイツの魅力 —

A.E. (ジョージ・ラッセル)²⁾

成し遂げた功績によって讃えられる人もいれば、すぐれた人柄で讃えられる人もいる。私は芸術家としてのジョン・イエイツ氏を何にも増して評価するが、彼の天賦の才は、相手の人間性をありのままに受け入れる心の寛さではないかと思う。肖像画家が、知り会った人物、描いた相手すべてに興味を抱くのは決して容易なことではない。イエイツ氏による肖像画には、男女を問わずどれにも、彼の愛情がこめられているように思える。若者老人を問わず、彼の肖像画に描かれた人物にはその眼差しを通して語りかけてくる魂のようなものがあつた。そのせいか、彼の描いた肖像画を見た後では、以前よりもその人物に好感を抱くようになったのである。最初に彼の絵を見ていなければ、きっとその人物をそれ程まで好きになることはなかつただろう。一部がすでに出版されている愉快的手紙やエッセイを読むと、肖像画のモデルに対して、イエイツ氏が心中ひそかに感じていたことが何となく伝わってくる。彼は肖像画の中でモデルとなる人物の本質を常に見極め、その人物らしい、あるがままの生き方を求めている。

エッセイの一つで、彼の讃えるアメリカ女性が本来の生き方をするのは容易なことではない、と残念がる部分がある。一人の女性が、理想の娘、理想の妻、理想の友を兼ね備えようとするには、あるがままの人間性というだけでは十分とは言えないからである。おそらく、イエイツ氏は老子を知らなかつただろう。(それにしても、この知恵の泉が何と人々に知られていないことか。)だが、形而上学者、経済学者、理論家の思想では飽き足りないイエイツ氏なら、「自然のままであれ」という教えを信条にした、かの中国の賢人を好んだことだろう。それ以外の宗教はたいてい家庭の温もりや愛情から私たちを遠ざけ、

2) ジョージ・ウィリアム・ラッセル (George William Russell, 1867-1935) : 北アイルランドのアーマ州の生まれ。ジョンの子、イエイツとは学友とともに神智学協会に参加。青年時代のイエイツと交友があつた。『歌とその泉』、『詩集』、『知恵の実』などで知られる。

厳しい戒律で縛りつける。しかし老子だけは物事の改善には終わりが無いことを知るがゆえに、宗教指導者の中でただ一人、改善しようとする者のことを聞くとため息まじりに言うのである。理想の国では、人は今の自分に満足し、たとえみすぼらしくともその服を立派だと考え、質素な食事でも旨いと感じるものだ、と老子は述べた³⁾。その教えから思い出すのはイエイツ氏のことだ。改善し過ぎるとアイルランド農民がこの地上から姿を消してしまう、という彼の懸念が思い浮かぶ。彼は自分が自然のままであることを喜びを感じていた。そのままの状態、素朴で、心打つものを、なぜ変えようとするのか。自然のままとは、その価値が損なわれていないことである。

イエイツ氏が絵画や手紙など随所で探し求めたのは、顔や精神をそのまま表す輪郭や感情であったように思える。オーペン氏⁴⁾の精巧な筆遣いとイエイツ氏の見事なデッサンには確かに驚かされる。しかし、イエイツ氏の絵画で女性の顔に魅了されるのは、斬新な手法に対する一時的な興味からではない。大昔から受け継がれてきた女性らしい柔和な美が、その表情、眼差し、唇に描き出されているからだ。その優しい眼差しを見ていると、母親や妻なる者は、開闢以来、そのような眼差しで子を見守り、男たちを魅了し、みずからの周りに家庭や文明という隠れ場を築こうとしてきたのではないかと思うほどだ。イエイツ氏は、女性のこのような願いをよく理解していた。その願いとは、絵画を単なる美人画へと貶めた者たちが考えたような表面的な美ではなく、精神美であった。また、彼を知る者なら、相手を魅了する話術が、モデルの負担をどれほど軽くしたかを思い出すだろう。天は賢明にも、話術の才と肖像画家の才の両方をイエイツ氏に与えてくれた。芸術家とは、制作に没頭するあまり、いつまでも作品を完成させようとしなないものだ。それというのも、画家とは、魂の新たな輝きを常に追いつけ、もっと自然で相応しいと感じる表現があると、その時まで美しいとしていたものを新たな表現に変えようとするためである。画

3) 『老子道徳教』 80 章。

4) ウィリアム・オーペン (William Newenham Montague Orpen, 1878-1931) : アイルランドの肖像画家でケルト復興運動に関わった。市立美術館の設立者 Sir Hugh Lane の友人としても知られる。第一次世界大戦中、従軍画家として多数のスケッチや絵を残した。

家に魅力的な話術でもなければ、モデルは絵が描き終わるまで我慢できないだろう。

イエイツ氏を知る者は、このエッセイを読むうちに、彼の話に賛同しなくても、読む者の心をいつも刺激し、自ずから思索へと向かわせる、あの話し振りを思い出す。この時、読者は彼の深い思想に気づくことだろう。ただ、それは、どうかすると、深い意味を見落としてしまうほど、何気なく語られるであろう。また、とても愉快的愚行でさえ、某かの真理があると思えるほど、快活で楽しく語られる。こうした空想や気まぐれのような思いつきでも、たぶん本当のことに思えてくるのである。自然が生み出す最も愉快的な営みの一つは、自分の尻尾を追い回す子猫の姿だ。これ以外にも自然が創造した数多くの営みをみると、心温まる愚行には、さまざまな知恵の一つが示されているように思われる。その知恵こそ、生きるためにその喜びを見いだし、創造のためにつくる喜びを見い出すことに他ならない。あるいは、イエイツ氏が別の場所で述べているように、悲しみを忘れるために不運を受け入れることに相違ないだろう。

私たちアイルランド人は、隣人に大切な美徳と生きるための心の張り合いを奪われたとき、自らを慰めるために時として不運を愛する以外に為すすべもなかった。そのことがアイルランド人にとって、どれほど辛いことであっただろうか。このエッセイを読む人たちは、イエイツ氏がとても機知に富む人であることを悟るはずである。彼は自分の愉快的な言葉は、何を言おうが批判されることはないと考えたのだろう。「根拠のない意見だから、それを問い質すことはできない」と半ば悪戯っぽく語っている。私は、これを書いた人物の思想について議論や批評をするつもりは決してない。というのも、彼は私の理解を超えているからである。私にはこの本は楽しんで読むだけで十分である。それはきっと彼の友人たち、またこれを読み新しく友となる人たちにとっても同じことだろう。ともあれ、私たちは、ニューヨークのベリンガー夫人に感謝の念を抱いている。夫人は、これらのエッセイがさまざまな刊行物に掲載されると、それを切り抜き、大切に保存してくれていた。作家というものは、書いた内容、掲載雑誌のことなどすっかり忘れてしまっていることが多い。前述の子猫